

血を咯きつゝ

二部生 城

本

生の悩みを覺えてから殆ど二ヶ年、自ら強いて強く生きんと欲しても而も強く生きることの出来ないことが、邁往直前を以て理想とする生命の最も高潮に達した青年には異常の痛苦であらねばならぬ。サムシングの爲に、人にもつと尊い物の在ることをも忘れてゐる自分が寧ろ不便である。

華しい花を索むべく武夫の原に集へる同胞の幾人かが、徒らに高鳴る生命の躍動に悶てゐる。その若き人々の闇みを、聊かなりとも憫みて貰ひたいためなのである。此の文を草する、やがては本誌に寄するの積を永遠に失くするの前途となるかも知れぬ。

一片の麵麩を圍繞してゐる群集の中には、厳しい階級制度に疲れ切つた労働者がある。自分と同じ類の人間に拵へた法の制裁に不平な罪人と云はれる可愛想な囚人がゐる。角袖の警察官も混じつてゐる、「パンを興へよ然らば道を教へん」と絶叫してゐる教育者流のものも見える。藝術の假面をした女優もゐる。質札を有つてゐる僧侶もゐる。貴婦人らしい賣春婦も加はつてゐる。

混沌たる現實社會は、是等の者の複雑なる争闘軋轢に過ぎぬ。是の激しい不斷の争奪に腰折れて、自己の火の光の沈滞に煩へる民こそより憫むべきではないか。

求めよ、さらば興へられん、叩けよ、さらば應へあらんとは往昔ナザレの聖者が、峻嚴なる律法の神ヤーエをば慈愛に満てる神として民衆に撒き興へし時、盡きざる麵麩の在所を示せる眞理である。然して求め得ざる、叩き得ざる民衆こそ憫むべきである。

死と云ふ事實は、早晚この人類のみならず生きとし生ける凡ての物の上に齎らされる。是れ何人と雖も、決

して否定することの能きぬ事實である、そして、必ず來るべき死その物には、吾々も些少の不滿無い筈である。然しながら死を意義あらしめんがために、生存を持續せんとするは吾々の強烈な本能である。

氣味の悪い程美しい血を略いてから、自分は甫めて肺病患者であると云ふことを自覺した。二十有三年來、曾つてしたことのない恐怖と不安の氣分が、全く自分を戰慄せしめた。自分は自分の肺から略いた鮮かな血を眼前見た時に事の唐突に殆ど狂亂した。

八月と云へば、まだ暑い／＼眞夏の、病院の窓際には桐の葉が大きな影を投げてゐた頃であつた、自分は入院せねばならぬことに一種の恐怖を有つた。「彼の眞四角な面も單調な天井は何日まで自分に悲哀と寂寞とを與ふるであらうか」とは入院當時、少からず自分を惱ました不安事であつた。

殆ど凡ての人に回避せられてゐる肺病てふ魔に胃されたと云ふ事を自覺した時に、死と云ふ問題が吾々に及ぼす方を痛烈に感じた、全く肉体的に生死の境に到達して見なければ、吾々は人間の生とか死とかを嚴肅に意識する事は能きない。

烈しい活動の舞台から離れて、いつも黄昏の様な仄暗く陰氣で、血腥い風が絶えず北から南へと吹いてゐる外には、忍び足に廊下を通つてゆく醫員のスリッパの音と看護婦の衣すれとのみにて、死んだやうな寂滅した陰鬱なその大きな建物の一隅の冷たいベッドの上に横臥して、過去の追憶から未來の憧憬へと思を移して行く間に、烈しい心の攪亂を覺えた。自分は氣息の絶わんとする最後の瞬きの苦痛を悲しむものではない。嘗つて、此の胸の中に企てた理想が、片つ端から此不自然な段落點によりて打毀され、そして、自分の歴史を自分の手で閉ぢて了はねばならぬことを悲しむのである。

土に無韻の詩があり、沈黙の歌があると、昔、或る田園詩人は歌つて其の生を樂しんだ。若し自分に其の昔の田園詩人の心になつて、土を樂しめとか生を樂しまねばならぬとか命する者があつても、無條件に直ぐその命を奉ずることは、少くとも今日の自分には出來ない。萬一死を免れたりとするも、十有五年の學生々活を業半ばにして退かねばならぬと云ふ冷感が、寧ろ自分の心を寒からしめた。久しく肺患に悩み、斷然龍南の地に永別せんとし、同郷なる友吾に致したる亡き友某君の最後の書の悲哀に充てる句が、現今の自分に甫めて泌々と感ぜらるゝ。

四ヶ月余りの病院生活も、自分の病には殆ど何の効果も見ねなかつた。假令あつたとしても其は微弱なものであつた。生の意義がないと云ふことが、吾々に最も苦痛であり、又最も壓迫である。絶対に禁じられた運動には大した不自由を感じなかつたにしても、讀書すら制限せられたことは少からず痛手であつた。

隔日交代の院長部長の回診の外に、若い醫員が診に來ることが多かつた。何にも知らない癖に好い加減な醫者らしいことを云つて行くのが常であつた。養生に懸命になつてゐる患者にはそんな不安定な慰安の言葉が寧ろ馬鹿らしくなつてくる。

或る刺戟の後で甚しき興奮のために、眠ることが能きないで、深更蒼白い月の光を浴みて孤獨と悲哀とに泣いた夜も幾度かあつた。

想像の花冠のためにあらざれば、誰か死の前に、敵を讚美し稱揚し得るものぞ、

噫死哉!!

何等の富貴も何等の善美も、人類の生命を償ひ得ず、

是が感激の叫びであつた。

冷たい冬も日毎夜毎に薄らいで、世は暖かい春を迎へた。靜心なく追ふ人々の花にも涙をそゞぎ、楽しく歌ふ鳥の聲にも驚かさねばならぬ自分には、風物日に荒涼に赴くのみであつた。

かくして半歳の間寧ろ自分は輕快の氣分にあつた。一度亡くしたと思つた生命を辛うじて取り止めて、再び希望の光に歡ばんとしたのも時の間で、殆どその兆さへ息みたる恐ろしい陥血が、又突如として現はれて來た。殆んど癒つたものと自覺してゐた自分は、再び冷たい死を直覺した。

醫者の勸告にも従ふことが能きないで、多少の不安と幾分の恐怖とを以て自分は再び龍南の烈しい争鬪の間に顔を出した。強烈な生の鬪争そこに吾々の美と吾々の力とが在り得る。吾々の生の何物かが努力の火花となつて出現した時に、吾々の強味、吾々の意義を感じる。無意識な、絶望的な、放浪的な過去一年間の月日を顧みて、自分の不確かな思想と、境遇の推移と、それから感傷的な過去の徒勞が、不愉快な追憶である。

凡ての事に好い加減と云ふことは恕されぬ。生きんとする自覺に伴ふ内心切なる欲求は既に人生に對する生の宣戰であらねばならぬ。そこに甫めて生の價値がある。製圖のためには徹夜もしなければならぬ。日曜祭日は吾々のためには製圖日である。數學の問題日である。是が現今の弱い自分には少からざる長物である。女の所、自分と云ふものを分析し、正直に解剖して見ても、清新、潑刺、豪爽、濶達などと云ふ分子よりも、寧ろ懊惱、煩悶、痛嘆、萎靡などと云ふ分子が優らざるを得ない。求めて得ざる悲哀、光明を失へる寂しさ、享樂を欲して哀傷を獲、充足を捉へんと欲して虚無を掴み、有を追及しながら空に逢着せんとする忌々しい境地に焦慮してゐる。

「人生の落伍者、哀むべき弱者」と云ふ酸ばい響が沈黙に鋭く唸つてゐる。死すと云ふことは苦しいことに違ひないけれども、忍苦の生活を持続して行くと云ふことは、より強いものでなければできないことだ。常に新しき生命を獲得することに努力することが、吾々青年の眞生活であらねばならぬ。而してこの強い精神の寓すべき強き肉体の伴ひ得ざる最高の不幸である。

苦しい胸痛を覺ながらも毎日の少しづつ、の知識の吸入に努めなければならぬ自分が、可愛想に思はれてならぬ。「我が身知らずだ」と自らを罵つて見ることも屢々であつた。然しながら「最後の血を咯くまで行んだ」と斷案が何時も自分の決意に暗い一段落を附けた。

現實暴露の悲哀と云ふことが弱い自己に強く而も深刻に感ぜられる。深烈な刺戟を受けて嚴肅な理想に生きるため能き得る限り心の弦を緊張さして見る。然しながら現今の自分には氣分に行を並行さして行くことはできない。奮起發興の鐘の亂打の響が一々鋭敏に自分の神經に感ずるその時、幾ら嚴肅な生の意識と努力とを持久して行きたいと焦つても、自分の肺から咯いた腥い血を自分の舌の先で味ふ時には、とてもそんな強い活々した氣分を意識することはできない。復又不徹底な不統一な氣分に反らねばならぬ。

死と云ふ力が強ければ強い程、夫れだけ生に對する欲求が熾烈になつて來る。是れ齊しく青年の欲求であらねばならぬ。(大正六、二、二〇稿)